

火星



七曜抄

山尾玉藻

耕してありし紙漉き小屋の裏

花桃をバケツに紙を漉きゐたり

白鳥の魯田を踏む別れかな

湖のもの食うべし湖の大霞

二上山は晴れ種池はにぎりけり

松の枝に神鷄のゐる挿木かな

観音の軒端に春の虫柱

げんげ野にポットの湯気を上げにけり

大きいやうな小さいやうな草の餅

名付け屋に人の入りゆく朧かな

火星作品

山尾玉藻選

薄氷に日の差してゐる一回忌
宅配のすき間を埋める雛あられ
石道寺てふバス停の露の臺
水仙の畑の果てなる発電所
寒さ言ひ合ふ盆梅展の庭
積まれある藁ぐつたりと初音かな
はだれ野をかんできの火の通りけり
朧なる舟着いて舟水を吐く
鴨一羽寄り来し顔を逸らしつつ
口開ける鼬の罨のうすごほり
冬耕の土を握つて嗅ぐことも
風花の山や鐵斎見に行かな
箱出でし土佐の土筆の煙なり

明石戸栗末廣
西宮米澤光子
箕面浜口高子

寝かせあるバツト三本芝萌ゆる
握りゐるたんぽぽ大事滑り台
牛の尻みなうつくしき睦月かな
はだれ野のふくらんでゐる鹿の胴
春氷寝間着の父にひかりけり
菱餅の色にもらひぬ春の風邪
つちふるや枕一對買うて来し
悪相の覗いてゆきし冬牡丹
水仙に鬘ありぬさうおもふ
紙漉の春のあはひを漉いてをり
盆梅の鴨居斜めに抜けにけり
遠江の雪間に在す佛どち
掌をすべる法然院の薄氷
三楹や人間国宝認定書
手の窪のも色なりし紙漉夫
飛び石を渡つてをりし紙懐炉
梅三分めぐりて来たり握り飯

大和郡山 城 孝子

神戸 深澤 鱧

八幡 飯塚 糸子

選のあとに

山尾 玉藻

宅配のすき間を埋める雛あられ 戸栗 末廣

自宅の居間辺りでの囁目詠である。奥様が宅急便の荷造りをされている様子を作者は見るとはなしに見ていたのだろう。孫を持つ私にも同様の経験がある。もしかすると作品に同じようなものがあるかも知れぬが、「すき間を埋める」で水準を大きく越えた。「雛あられ」も美しい。同時発表の〈石道寺てふバス停の路の臺〉の「石道寺」を知らない者にとつてもこの固有名詞の働きは解るであろう。「路の臺」の何気なさも良い。また〈水仙の畑の果てなる発電所〉は、丹後から越前へかけての海岸に何基かの原子力発電所を見ることが出来るが、その内のひとつの景であろう。「畑の果てなる」が良い。無機的な「発電所」に対してせめてもの心の和む景である。

積まれある藁ぐつたりと初音かな 浜口 高子

柵田辺りの景か、去年から積まれてある藁が風雨に曝され「ぐつたり」しているのであろう。「ぐつたり」は擬人法的形

容であるが一句に溶け込んでいる。木の濡れなどに対する「初音」ではなく、実景の中で捉えている強さがある。同時発表の〈はだれ野をかんてきの火の通りけり〉は、母屋から離れ家まで「かんてき」を運んでいる景などを想像すれば良い。「はだれ野」はその途中に見える景である。この「はだれ野」、俳句的省略の妙と言つて良い。

箱出でし土佐の土筆の煙なり 米澤 光子

本体の荷物の他に小箱が入れられてあり、開けてみると土筆「だったのだ。「煙なり」はムードではなく、感覚としての実感。蕨や薇では成功しない。どこやら胞子を思わせる「土筆」ならではの句である。送り主の心配りも窺い知れる。

菱餅の色にもらひぬ春の風邪 城 孝子

岡本高明の句に〈風邪ひきぬ雛の軸に囲まれて〉があるが、掲句の方は女性らしく優しい。「春の風邪」の春が季重なりとなつているが、この句の中では必要である。まさしく「春の風邪」をひいたのである。

紙漉の春のあはひを漉いてをり 深澤 鱧
五つ六つ路の臺ある紙漉場 山田美恵子

紙漉の掬ひし水の音とある 築田たかゑ

「紙漉」は冬の季に入っているが、現在はむしろ一年中行われている。冬季に入ったのは、寒中に上質紙が作られた事と農家の冬の副業的な色合いが強かった為である。先日の名塩の吟行は立春も過ぎていて、鱧さんと美恵子さんは春の季で作られた。たかゑさんは冬季のものだが、作品を作る上ではそれで一向に構わない。「春のあはひを漉いてをり」は、冬の厳しさと対照的に、春の駘蕩とした気分が出ている。「五つ六つ露の臺ある」は、紙漉場らしい情景の中での季節の移ろいが感じられる。「掬ひし水の音とある」には、寒さ厳しい中で静けさが出ている。

飛び石を渡つてをりし紙懐炉 飯塚 ゑ子

発見があると言うほどの珍しい句ではないが、下五「紙懐炉」といきなり放り出した所にゑ子さんらしい叙法がある。これも俳句的省略の一つである。

立春大吉喧嘩のできるひととゐて 野澤 あき
えこひいき無しとは言へず寒の施肥 吉田 島江
夫亡くて嫌ひになりし春炬燵 戸田 春月

三句それぞれ叙事的で主情の勝った句である。普通叙事的な作り方の癖がつくと瑣末になつたり句が痩せてくるので戒めているが、このように成功した作品に文句は付けない。三句共断定の形をとっているが、俳味やアイロニーの句にはこの断定がよく効く。「喧嘩のできるひととゐて」は、争い事の嫌いな作者らしいところである。〈虎の威を借る〉と言う諺があるが、それでも作者にとつてこの時間は快感なのである。「えこひいき無しとは言へず」と断定しているが、ある方が当たり前でこれが作者の謙虚さである。「夫亡くて嫌ひになりし」は俳味やアイロニーとはちよつと違うが、表現方法にはやはり滑稽がある。これらの句の成功は「立春大吉」「寒の施肥」「春炬燵」の季語の斡旋の良さにあるのは言うまでもない。

薄氷に靴先揃へをりにけり 金澤 明子

この情景をよく掬い上げてきたと感心するほど、微妙で繊細な景を詠んでいる。「薄氷」の張った水辺に靴先を揃えたと言っているのだが、実際は靴先を揃えながら近寄つて行つたのである。もう少し近づけば「薄氷」は割れてしまうのだろう。惜しみながら近づくとと言う緊張感のある遊びどころである。何でも無さそうな作りであるが、秀品である。

玉藻俳句鑑賞

陽炎をよく囓んでゐる羊かな 玉藻

〔火星〕平成十四年六月号より

日ざしが強く風の弱い日に、遠方のものがゆらゆらゆらいで見える陽炎、その中に羊がいる。羊は群がって棲みどれもが同じようにもぐもぐ口を動かしているのだが、一頭に焦点を当てる。陽炎を囓んでいる、の楽しい発想。そして「よく」のなんでもないような言葉が景を確かなものになっている。句会で初めて見たときから好きだと思った作品。

（典子）



恒星巻

木野本加寿江

盆梅におもしろをかし法話かな
日の当る隅へ隅へと春落葉
春一番輪切りにしたる茹で卵
笹鳴のしばらく居りし隅櫓
沈丁に庭の砂利石濡れてをり

加古みちよ

城孝子

雲外れて冬耕の土かがやけり
水仙へきれいな声の近づけり
余寒かな畑のビニールひらひらす
耕運機有無をいはさぬ早さかな
ゴミ捨てに出て夕方春一番

錆色の葱の先より寒明くる
藁浮いてゐる如月の金魚池
佐保姫に鹿垣の戸開いてをり
亀鳴くと母の部屋より暮れにけり
折り足してさびしかりけり紙雛

金澤明子

杉浦典子

盆梅の開き切つたる五、六輪
鮎^{こり}湖^{いさぎ}北の朝餉しぐれけり
鴨の湖保養所は湯を溢らしむ
白鳥を数へ残せし湖昏るる
きさらぎの金ンの三日月ゆりかもめ

崖下に波寄せてゐる如月菜
ゆつくりと水温みだす名塩村
桃咲くや瀧場に長き木の杓子
三極の花石白の乾きゐる
合格す母より長き手足して

獅子座

山尾玉藻推薦

中上 照代

立春の文字きらきらと目に射さる
立春の鷗群れぬるお濠かな
うかと出て春の疾風にさらはれさう
卓上の見る見るひらく桜かな

山田美恵子

泥紙を漉く春の灯をともしけり
五つ六つ路の臺ある紙漉場
かぎろうてぬし膝の上の医学書と
初花に風吹いてゐる登山口

堀 義志郎

建国の記念日父の忌なりけり
立春の日の丹波屋でありにけり
盆梅の幹三百年の枯れなりし
梅固唯一人になつた祖母しコバルトかけてゐたりけり

小林 成子

水仙の墓前に順の廻りきし
相寄りしかたちの句碑や春浅し
ものの芽や夕陽丘の音遠し
三極にホース伸びゆく山の晴

奥田 順子

鳥雲に骨すつぽりと納まりぬ
老僧の手招きしをり路の臺
花八ツ手畳にならべ形見分
満開の紅梅莫莖の湿りきし

西畑 敦子

マンションに追儼の面の消えにけり
あたたかや電池仕掛けの招猫
梅林を出て栗餅の列にをり
絵馬堂の天井高し梅の風

高松由利子

薄氷の蘇州は朝の菓子蒸し
産土の雁皮紙守りて冴返る
漉草に寒明けの陽のゆれてをり
薄氷の門かどへ五十集の荷を解く